

# 中国 50歳の素顔

● ボーダーレスの光と影 ●

イタリアで開催中の世界最大規模の現代美術展「ベネチア・ビエンナーレ」の企画展。今年是中国のアーティストが、全体の約五分の一に当たる二十人以上も選ばれ作品を発表した。

かつては共産主義の宣伝と教育の手段として活用され社会主義リアリズムの手法が主流だった中国の芸術。今は最も現代的な美の発信源として世界の注目を集めている。北京でも若い芸術家たちがさまざまな制約と闘いながら意欲的な創作に取り組んでいた。

ビル建設ラッシュの北京。取り壊しを待つ古い壁や高架橋の橋脚に、一筆書きのような男の横顔が並んでいるのを見かけることがある。現代アーティストの一人、張大力氏(さん)の「作品」だ。

「僕の自画像なんだ。似てらるろう」。伝統建築が急速に失われ「アグリー(醜悪)

な」近代ビルが取って代わることへの抗議と皮肉が込められている。カラスプレーをバッグに忍ばせて街を歩き、あつという間に描き上げる。いくつアートだと言われても、警察から見れば違法行為の疑い濃厚だ。「何度か警察が警告していった。でも正面から政府批判をしているわけではないし彼らもあまり力が入らないのさ」

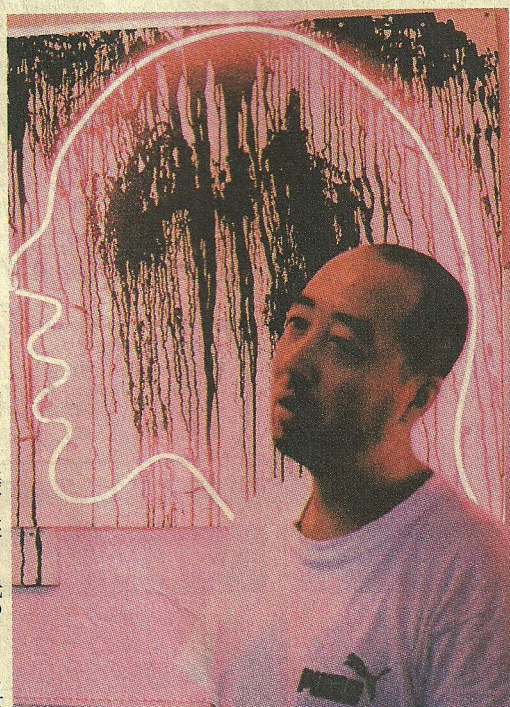
張氏が求めているのは市民との「対話」。最初は落書きと見ていた市民の反応にどんな変化が表れるのか。ビルと壁と男の横顔が作り出す情景に込めたメッセージをそれぞれに受け止めてくれれば、それでいいという。

「確かに中国では芸術への

## 制約と闘う若い芸術家

▶ 4

# 美の発信に世界注目



北京市内の自宅で、自らの作品を前に芸術について語る張大力氏(共同)

規制や、発表の場の少なさに焦りを感じるけど、ここを逃げ出して海外で作品を発表しても、パワーは持ち得ない」映画でも世界を目指した試行錯誤が続く。一九八〇年代を中心に、第五世代と呼ばれる監督たちが「紅いコリヤン」「黄色い大地」といった芸術性の強い作品を次々に生み出し、世界に中国映画をアピールした。しかし、その後

「第五世代の監督には新しい中国映画を世界で紹介する強い使命感があった。僕は個性を表現すると同時に、大衆にも受け入れられねばならないという難題を抱えている」と言う。

上海発行のファッション紙のアート担当編集者、薛輝先氏(さん)は「市民の美に対する理解と関心は最近大いに進んだ。だが、内陸ではまだまだ」と大都市と農村の格差を指摘した。(共同)

中国の現代アート 奇抜で斬新(さんしん)な表現の絵画やパフォーマンスに、体制批判や社会風刺を込める中国の現代アートは、民主運動の進展と並行して広がりを見せた。当局は治安への影響を恐れて、芸術家のたまり場の解散や美術展の禁止などで規制を加えたが、既に外国で高い評価を得たアーティストも数多い。(共同)